

令和6年度 看護学部教育課程 アセスメント結果報告書

1 評価結果

看護学部のDPの評価は、DP1に関して外部試験を活用した学びの基盤として「思考力確認」、看護系大学協議会が作成した「看護学士課程教育のための卒業時到達目標（以下「到達目標」）」、DP2～DP4に関して「到達目標」と「科目GPA」、DP5に関して「到達目標」と実習を通して実践を記録し主観的評価から確認する「臨地実習における看護技術確認表（以下「技術確認表」）」、DP6に関して「思考力確認」「到達目標」、学部教育の学修成果が表れる「卒業研究ルーブリック」を用いている。

DP1の「思考力（GPS-Academic）」については、2021年度、2022年度入学者の3～4年間の推移を検討した。思考力は2つの方法でアセスメントしている。選択式では学年進行による得点上昇は見られなかったが、2024年度の4学年比較では4年生が最も高値を示した。また、記述式では、安定した成績が確認できており、一定の思考力の高まりがみられた。

DP2～DP4について、「到達目標」ではヒューマンケアや計画的実践の到達度が高く、国際的視点は低かった。「科目GPA」では1・2年次の基盤科目の平均が学年進行で上昇し、学びの積み重ねが示唆された。

DP5では、「技術確認表」で基礎的技術は多様な場面で繰り返し経験され高い実践力が育まれた。一方、注射や救急処置など侵襲的・高度技術は実施機会が限られており、到達度が十分でなかった。背景には患者安全や倫理的観点による制限、実習環境や指導体制の差がある。また「到達目標」によれば、看護実践能力は学年進行に伴い着実に向上し、卒業時に高い自信を獲得した。

DP6について、「到達目標」では専門職として研鑽し続ける能力が他より高かった。「卒業研究ルーブリック」では、学修目標に合わせて8項目を設定し、1～4点（4点が自己評価が高い）で学生が自己評価し、4点満点のうち、8割以上の学生が3点以上であり、探究・発展の基盤を獲得できたと考える。

DPに関わる能力獲得の自己評価について、4年次最終アンケートでDPに関わる能力の高まりを確認したところ、「多様な場での看護提供の方法」「実践に活用できる看護の知識と看護技術」「実践に活用できる医学的知識」「人を尊重する姿勢・態度」「深い人間理解」「幅広い知識・考え方」「問題発見と課題解決力」「批判的・論理的な思考力」「主体的に学修する姿勢」において、80～90%の学生が「とてもそう思う」「そう思う」と回答していた。主観的評価ながら自身の成長を自覚することは、自己肯定感にもつながる重要な要素である。

2 今後に向けての改善点

今後に向けては、各アセスメント項目を丁寧に評価し、教育内容や教育方法、到達目標の見直しを進める必要がある。特に、人体の構造と機能、地域保健、国際的視点、健康課題への対応に関する知識や技術を強化する教育内容の充実が求められる。また、シミュレーション教育の拡充や評価体制の整備を進めるとともに、臨地実習と学内教育を有機的に結び付けることが重要である。さらに、卒業時到達目標の明確化と水準の見直しを図り、学修成果を可視化する仕組みを整え、教育の質向上につなげていくことが課題である。

令和6年度 社会福祉学部教育課程 アセスメント結果報告書

1 評価結果

社会福祉学部では、DP と CP に基づき、各 DP に掲げられた能力を育成する関連科目群の GPA の得点傾向を用いたアセスメントと、DP にかかわる重要な科目として「社会福祉基礎演習ループリック」「卒業課題研究ループリック」を用いたアセスメントを行っている。

DP1 については、対象学年（1年生）平均 GPA に比べて、教養科目 GPA はわずかに下回っていたが専門基礎科目 GPA は上回っていた。

DP2 では、基礎科目 GPA が対象学年（2年生）の平均 GPA と変わらなかった。また、基礎演習科目ループリック評価の結果では、どの項目も尺度中点を上回っていたが、相対的に見ると参加・準備・関与といった演習への取組みに関しての評価が高い一方で、レポート作成での分析・考察や全体の完成度などといった内容面での評価が低い傾向が見られた。

DP3 については、展開科目群 GPA が対象学年（3年生）の平均 GPA を上回っていた。

DP4 では、基幹科目群 GPA は対象学年（2年生）の平均 GPA を下回っていた。

DP5、DP6 については、両学科の発展科目群 GPA が対象学年（4年生）の平均 GPA を上回っていた。卒業課題研究ループリック評価の結果では、総じてどの項目も尺度中点を上回っていたが、あえて挙げるならば考察・結論の妥当性・信頼性に関する評価が相対的に低い傾向が見られている。

昨年度と比較して、DP1 に関する評価はいくらかの変動が見られたが、その他の DP に関する評価については概ね一致している。DP3、DP5、DP6 の評価は比較的高く、高年次の実習科目に対する積極的な取り組みと、それまでの学習成果を反映した結果と解釈できるだろう。それに対して、DP4 に関する評価の相対的な低さとループリックでの評価の低い項目については、低学年時の基幹科目の理解向上や論理的思考・文章表現力の底上げといった課題も考えられる。一方で、今年度 1年生から入試形態変更とカリキュラムの改定が行われたこと、評価対象となっている科目群での担当者変更が予定されていることを踏まえ、今後の動向を注視して検討せねばならない。

2 今後に向けての改善点

- ・基幹科目群の学習に関する現状把握とそれによる理解向上の方策検討、論理的思考力や文章表現力を向上させる科目設置あるいは科目内容変更に関する検討。

令和6年度 ソフトウェア情報学部教育課程 アセスメント結果報告書

1 評価結果

DP1 は、社会への関心に関わるディプロマ・ポリシー (DP) である。「卒業年次アンケート」より、DP1 について学生の関心度は高いことが示された（根拠資料：「卒業年次生アンケート」）。また、代表的な科目についても、科目 GPA は十分高く、全体的に成績は良好であり、学修成果が着実に向上していることが示された（根拠資料：「成績一覧表」）。

DP2 及び DP3 は、課題発見・解決能力、専門知識および幅広い教養に関わる DP である。代表的な科目である「プロジェクト演習」の自己評価では全体的に向上が確認され（根拠資料：「プロジェクト演習自己評価」）、授業評価アンケートでは多数の肯定的評価を得ております（根拠資料：「授業に関する授業評価アンケート」）、代表的な授業科目群の科目 GPA と単位取得状況も良好であることから、学修の成果が示された（根拠資料：「成績一覧表」、「卒業論文最終提出許可サイン」）。

DP4 及び DP5 は、自己研鑽力、幅広い教養およびコミュニケーション能力に関わる DP である。代表的な科目である「卒業研究・制作」では DP4 と DP5 の達成が認められ（根拠資料：「卒業論文最終提出許可サイン」）、「プロジェクト演習」の自己評価でも全体的に向上が見られている（根拠資料：「プロジェクト演習自己評価」）。また、専門性の高い科目群の単位取得率が高く、科目 GPA も十分に高く、全体的に成績は良好であった（根拠資料：「成績一覧表」）。

DP6 に関しては、学生が専門知識を深め、数理・情報技術の分野に柔軟に対応する能力を着実に高めていると評価されており、代表的な科目の履修状況とコース演習の合格率からも、専門性の向上が明確に示されている（根拠資料：「成績一覧表」）。

なお、一部の学生が4年次で卒業要件を満たせず卒業できていないことについて、成績を精査した結果、不可となっている科目に偏りはなく、授業やカリキュラムに起因するものでないことを確認した（根拠資料：「成績一覧表」）。

以上のことから、カリキュラムが学びの基盤として十分機能していることが確認された。

2 今後に向けての改善点

- 今年度のアセスメント結果において、カリキュラム改定の必要性を示す具体的な結果は得られなかった。しかし、今後の教育の質の向上のために、このアセスメント結果を用いて学部教員が科目内容について検討するなどの活用の可能性を検討していく。
- 4年次へ進級したものの、卒業要件を満たせないケースについては、既存の評価指標のみでなく個別に精査するなど、今後も注意深く観察し、さらなる改善に活かしていく。

令和6年度 総合政策学部教育課程 アセスメント結果報告書

1 評価結果

今回は、学部専門科目において必修またはそれに準ずる講義科目群である、政策コア科目、必修の調査・分析科目、コース基幹科目を対象に、各学年の各対象科目群の学修過程における「不可」の発生状況の特徴や、「不可」の経験とディプロマ・ポリシー（以下「DP」）の自己評価との関連について分析した。必修性の高い科目群の学修過程における学生の「つまづき」の状況を把握し、カリキュラム見直しの手がかりを探ることをねらいとした。これらの内容は、アセスメント・ポリシー【アセスメントの方法と活用の詳細】における「1. 大学における学習の基盤を築くため基礎的な学力を保持しているかを確認するアセスメント」「3. 専門教育における学習成果を確認するアセスメント」「4. 実習科目における調査・分析科目の学習成果を確認するアセスメント」に相当する。

各科目群における「不可」の特徴としては、政策コア科目と必修の調査・分析科目では「不可」を1度も受けずに卒業要件に達する者が大半である。一方で、コース基幹科目では、2年生までに「不可」をほとんど受けずに卒業要件を揃える者と、「不可」を複数回受けながら卒業直前までかけて卒業要件を揃える者とで差が大きい。

「不可」の経験とDP別自己評価との関連については、政策コア科目とコース基幹科目では、DP1、DP5、DP6のいずれも、途中の学年では「不可」を経験した学生の自己評価がやや低いものの、卒業時では大きな傾向の違いはみられなかった。また、必修の調査・分析科目では、DP2、DP7のいずれも、途中の学年では「不可」を経験した学生の自己評価がやや低いものの、卒業時では大きな傾向の違いはみられなかった。

今回分析したいずれの科目群においても、1・2年生における必修科目で学んだ知識が、3年生以降における演習や実習などの専門的な学びで更に深められていることを示す結果が得られた。そのため、DP1、DP2、DP5、DP6、DP7について改善を要する問題点は無いと結論付けた。なお、DP3、DP4については、分析対象科目群とDPとの対応関係の都合上、評価を実施できなかった。

2 今後に向けての改善点

今回の分析結果からは、各対象科目群の内容の水準を変更する必要性を示す結果は得られなかった。ただし、今後のカリキュラム改定においては、学部の教育の質の全体的な向上の観点から、各対象科目群の内容の水準を変えない範囲で、卒業要件の設定の変更を含む他の科目群との関係性の見直しや、科目群内の科目構成の見直し、個別の科目内容の見直しなどを検討していく必要がある。

令和6年度 基盤教育課程 アセスメント結果報告書

1 評価結果

基盤教育（基礎科目・教養科目）のアセスメントは、基盤教育アセスメント・ポリシーにより「学修実態」と「学修成果」の2つの側面から実施することとしている。

学修実態

学生の授業選択理由は「興味関心の高さ」が主であったが、1年生は「楽に単位が取れる」や「魅力的な内容」といった外的要因や他者情報に基づく受動的な選択傾向が強く、4年生（主に留年生）は卒業要件達成のためと思われる形式的な履修が見られた。基盤教育は1・2年生で実質必修的に履修されるが、高学年では学部間で差が生じ、全体に減少傾向にある。また、履修学生の学部に偏りが生じている教養科目も存在した。授業への関心は受講後に有意に高まっていたが、授業へ取り組む熱心度は1・2年生で高く、高学年で低下していた。難易度は約6割が「ちょうどよい」と評価した一方、困難を感じていた学生も一定数いた。

学修成果

科目成績で約8割の授業で学修目標を概ね達成したが、「可」や「不可」も一定数存在した。GPA2未満の科目もあり、学修目標未達の可能性を示唆した。授業満足度は8～9割が肯定的評価だが、学年進行で向上していた（ただし、2年生でやや低い）。思考力は協働的思考力が全学部で低下傾向にあった。英語力はTOEIC Bridge（主に1年次）で全学部において向上し、TOEIC（主に2年次）にはほぼすべての学部で得点を維持していた。副専攻ごとに設定している身につける能力は、ルーブリックによる評価の結果、修了生の能力が他の学生より高く、年次進行で着実に向上していた。

2 今後に向けての改善点

1年生の受動的な履修選択傾向に対し、履修ガイダンスの充実や先輩学生の学修経験の体系的共有などの支援強化が必要と考えられる。また、高年次での副専攻等を含めた基盤教育の継続履修のために、その意義を再認識させる制度設計や方策が求められる。また、特定学部学生の履修の偏りを是正し、全学的に展開する方法を検討する必要もある。

学修成果向上には、「可」「不可」学生への学修支援強化や個別フォローアップ、GPA2未満科目への学修目標や教育内容の見直し、学生の実態の詳細な分析が必要である。さらに、高等教育機関で育成が求められる思考力の低下の要因を分析し、その育成方法の検討が課題である。

令和6年度 盛岡短期大学部教育課程 アセスメント結果報告書

【生活科学科生活デザイン専攻】

1 評価結果

DP 1 は社会で求められる汎用的な能力・態度・志向にかかる DP、DP 2 及び DP 3 はそれぞれ専攻の専門知識にかかる DP である。

DP 1 については、PROG テストにより、1 年次 4 月および 2 年次 9 月のリテラシー・コンピテンシーを測定し、成長分析を行った。1 年次、2 年次の結果を比べると、各分野で向上した学生もいれば低下した学生もいた。

また、DP 1、2、3 について、全科目の 2 年次通算 GPA において、設定する達成基準を満たす者の割合についても点検した。全体的に成績は良好であった。

さらに DP 3 について、二級建築士受験資格取得者に対し「二級建築士学科実力確認試験」によって受験に必要な知識の修得度を点検した。アセスメント対象者（建築士登録までの実務経験年数 0 年）は 13 人であり、卒業時の知識の修得度合いを認識させた。

課程の総括的な能力である DP 4 は、「卒業研究」を通じ、卒業研究論文集の作成や発表会評価により、問題解決能力や実践力の修得度を測定した。「卒業研究」の成績評価において、設定した達成基準を満たす者の割合を点検し、所定の能力を修得していることが確認できた。修得度は良好であった。

2 今後に向けての改善点

- DP1 の「幅広い教養」、DP4 の「課題発見・解決能力」については、より効果的な評価方法についても検討を続ける必要がある。

令和6年度 盛岡短期大学部教育課程 アセスメント結果報告書

【生活科学科食物栄養学専攻】

1 評価結果

DP1、DP4 のコアとなる能力は判断力である。本専攻は食に関する科学的な知識と技能を身につけ、食生活をよりよい方向へ支援する実践能力を兼ね備えた専門職（栄養士）として社会に貢献できる人材の育成を目指している。アセスメントには「PROG テスト」を1年次4月と2年次9月に実施し、『知識を活用して問題を解決するリテラシー』と『人と自分にベストな状態をもたらそうとするコンピテンシー』を数値化し、自己の能力を客観的に把握できるようにした。令和6年度2年生について入学時の結果と比較したところ、リテラシー要素では、情報分析力や言語処理能力に伸びがみられた。コンピテンシー要素では、行動持続力や計画立案力に伸びがみられた。令和6年度1年生については、過去の1年生の結果と比較すると、リテラシー要素では、情報収集力、課題発見力、言語処理能力などが上回っていた。コンピテンシー要素では、対人基礎力の分野で上回る傾向がみられた。

DP2、DP3 は栄養士に求められる資質や能力の形成を目指している。アセスメントは期末試験の成績から専門的な知識の理解及び技能の習得を確認し、履修指導を重ねるとともに、教育内容の点検を行った。令和6年度1年生の前・後期通算のGPAは「良」評価に該当する値2.0以上が91.6%、2年生の2年間のGPAは「良」評価に該当する値2.0以上が92.8%であった。また、2年生に対しては卒業研究での評価を専攻の教員全員で行った。卒業研究の発表会の場においては、積極的に授業に取り組んでいた様子が窺え、すべての学生が「優」評価に該当する結果となった。2年次の12月には学習の集大成として「栄養士実力認定試験」を実施し、専門職としての資質や能力を確認した。平均点については、本学は全国より上回った。各受験者の成績評価については、得点率60%以上の評価Aが84.0%、得点率60%未満40%以上の評価Bが16.0%であった。特に、今年度は得点率85%以上、かつ全体の成績上位者5%に該当する成績優良者が2名いた。

2 今後に向けての改善点

「卒業研究」の評価方法について、指導教員からは主に年間を通しての研究姿勢、その他の教員からは主にプレゼン能力についての評価を行っているが、今後は発表時の評価項目について具体的な項目を追加するなど、検討をすすめていきたい。

令和6年度 盛岡短期大学部教育課程 アセスメント結果報告書

【国際文化学科】

1 評価結果

DP1 については PROG テスト、卒業研究においてアセスメントを行った。大学での学修に必要な基礎力を着実につけるとともに各科目が相互に、学生の主体的行動を促すよう比較的良好なかたちで連動しているといえる。DP2 に関しては西洋・アジア・日本の文化や社会、交流の歴史について基礎から研究法、演習に至るカリキュラム構成の中で効果的に学習できるよう配慮されており、三地域における学修は適切に行われているといえる。DP3 に関しては、学生の自主的なインターンシップ参加に加え、正課での海外研修、地域でのフィールドワークなども取り入れることにより、学生の主体的な社会参加を促し、地域の課題や振興に対する関心を高めていると判断できる。DP4 に関しては TOEIC テストなどの英語能力の客観的評価に資するツールの受験を学生に奨励し、実践的能力を培うことで、コミュニケーション能力の向上に努めていると評価できる。以上より、DP1 から DP4 についておむね十分な学修成果が認められると判断できる。

令和6年度から実施している新カリキュラムにより、DP1 に関しては、教養科目の内容に関する質的充実を図っている。DP3 に関しては東北地方に限定した地域学習と、国際的視野を持った地域学習との間にいかに有機的連関を持たせるかが課題である。DP4 について、令和6年度から実施している新カリキュラムにより、第二外国語科目を必修とし新たにインドネシア語を導入するとともに、基礎クラスと上級クラスの学習内容を明確化することによって、第二外国語科目における確かな基礎力と実践的コミュニケーション能力の涵養を目指している。又、令和8年度から導入予定の CAP 制度に合わせ、カリキュラムの微調整を行なっている。

2 今後に向けての改善点

- ・ DP1 の基盤教養科目の内容の質的充実に関しては、令和6年度からの新カリキュラムにより、抜本的改善を図っているところであるが、今後も着実に科目内容のレベルアップを進めたい。
- ・ DP3 の地域学習と、国際的視野を持った地域学習との間の連関については、令和6年度から実施している新カリキュラムにより、適宜改善を図っている。
- ・ DP4 の第二外国語授業内容の充実に関しては、令和6年度から実施している新カリキュラムで新たに発展的科目の設定を行うなどして、より質の高い語学授業を展開している。科目ごとの履修者数の増減に注意を払いつつ、質の高い授業内容を保証したい。

令和6年度 宮古短期大学部教育課程 アセスメント結果報告書

1 評価結果

DP 1 については、1年次と2年次に実施した PROG テストにおいて DP 1 に関する課題発見力、構想力、言語処理能力、非言語処理能力、1年次6月及び2年次12月に実施した TOEIC Bridge による語学力、DP 1 に関する基盤教育科目の成績評価による成長分析を行った。PROG テストの結果（根拠資料 1：「PROG テスト結果(2024)」）、TOEIC Bridge の結果（根拠資料 2：「TOEIC 実施結果(2024)」）、基盤教育の結果（根拠資料 3：「科目平均 GPA(2024)」）から開講数のアンバランスが見られる教養科目を除き 1 年次から 2 年次にかけての成長が見られた。以上から学修の効果があらわれていると評価できる。

DP 2 については、PROG テストにおいて DP 2 に関する親和力、統率力、DP 2 に関する基盤教育科目及びゼミ科目の成績評価による分析を行った。PROG の結果、多くの項目で低下傾向が見られた。基盤教育の結果全体的に 1 年から 2 年生に向けての成長が見られた。ゼミ科目の成績評価では学年進行による専門性の影響もあり、低下傾向となっている。以上からおおむね学修の効果が表れていると評価できるが、今後、経年変化を分析する必要がある。

DP 3 及び DP 4 については、PROG テストにおいて DP 3 に関する協働力、行動持続力、DP 3 に関する専門教育科目及びキャリア科目、DP 4 に関する専門教育科目及び特別研究における分析を行った。PROG の結果、多くの項目で低下傾向が見られた。専門教育の結果、キャリア教育の結果、特別研究の成績結果から学年進行による難易度の向上の影響もあり、多くの項目で 1 年次から 2 年次にかけての成長に低下傾向が見られた。以上からおおむね学修の効果が表れていると評価できるが今後、経年変化を分析すると共に、学生に対し更なる分かりやすい授業を行っていく必要があると考えられる。

DP 5 については、PROG テストにおいて DP 5 に関する課題発見能力、特別研究における分析を行った。PROG の結果、特別研究の成績結果から多くの項目で 1 年次から 2 年次にかけての成長が見られた。以上から学修の効果があらわれていると評価できる。

2 今後に向けての改善点

DP 2、3、4 については、経年変化を見ると共に学年進行による難易度の向上を把握し、分析する必要がある。

また、学部 FD 等で授業や学生情報の共有を行い更なる授業改善に役立てていく。

令和6年度 看護学研究科博士前期課程 アセスメント結果報告書

1 評価結果

1) DP1 「看護学の理論に基づき、看護実践を分析し、記述することができる」

DP1 に係る各科目で自己の実践を振り返る授業が行われており、看護学の理論に基づき看護実践を分析し、記述できるようになった。1年次の学生は、全員が社会人であり、多くの学生が長期履修を利用して、DP1 に係る 1 年次に履修登録した科目の単位修得ができた。2年次の学生は、DP1 に係る各科目の単位修得ができ、研究論文を作成し、審査での指摘を修正する過程で、看護学の理論に基づき看護実践を分析し、記述する能力が培われ、通常期に 4 名が論文審査に合格した。

2) DP2 「独創性や発展可能性のある学術的に有用な看護学研究を行うことができる」

1年次の学生は DP2 に係る科目の看護研究法 I・II を単位修得し、看護学研究を行う基盤を身に付けることができた。主指導及び副指導教員による研究指導や、主指導教員の面接による学修の進捗への支援を受け、看護研究を推進する能力を身に付けることができた。2年次の学生は、研究課題を明確にし、独創性や発展可能性のある学術的に有用な学位論文を作成でき、通常期に 4 名が論文審査に合格し、修了者全員が 3 月 17 日に学位論文発表会（遠隔）で発表した。

3) DP3 「看護専門職としての看護実践能力・教育力・研究力・管理能力を養うことができる」

DP3 に係る科目の学修を通し、1年次学生 4 名中 2 名が倫理審査会を受け、研究計画が承認された。学生は、看護の臨床や教育現場から見出した研究課題への取り組みを通して、看護実践・看護教育・看護研究・看護管理に資する研究成果を得ることができ、DP3 に掲げる能力の向上を図ることができた。

学生は希望する科目の単位の修得及び研究論文の作成により看護実践能力・教育力・研究力・管理能力を培い、修了後の進路に応じてこれら能力の向上が図れたと評価する。

2 今後に向けての改善点

令和 6 年度 3 月に実施した修了時アンケートでは、本学の学習環境、指導教員の指導体制に対して満足度が高かった。

図書館の資料が古いという意見があり、教員選定図書調査等の際に対応することが必要である。

また、入学時アンケートでは、DP1～3 の達成に間接的に関連する意見として、休憩時間の確保、Wi-Fi がつながらないことがありネット環境の改善を求めるなどの意見があり、学習環境の整備を継続して行う必要がある。

令和6年度 看護学研究科博士後期課程 アセスメント結果報告書

1 評価結果

1) DP1 「独創性や発展性のある学術的に有用な看護学研究を自律して行うことができる」

全員が教育職に従事する社会人学生であり、総合的・学術的に看護学の発展に寄与する看護研究計画を作成する資質が培われている。2024年度は入学者が2名おり、自身の研究に役立たせるため博士前期課程科目である統計学特論の履修や、看護学特論を履修し、単位修得できた。2023年度に入学者がいなかったため、2年次学生は、現在、在籍していない。3年次学生6名のうち2名の学生は、予備審査、博士論文審査及び最終試験に合格した。

2) DP2 「看護専門職としての高い教育力・研究力・管理能力・看護実践能力を養うことができる」

学生は、教育力・研究力・管理能力・看護実践能力の向上に資する研究計画を作成中である。

教育現場で働く社会人が多く、3年次での休学率は50%で、仕事と特別研究を調整しながら、学修を進めている。職場での日々の研鑽も看護専門職としての高い教育力・管理能力・看護実践能力を養う（DP2）ことにつながっている。

3) DP3 「新しい看護学の理論構築や看護方法・技術の開発を通して、看護学の知識の蓄積・体系化に寄与できる」

1年次、3年次の学生は、新しい看護学の理論構築や看護方法・技術の開発ができるよう研究計画検討会に向けて準備を進めることができている。

3年次学生のうち2名は、予備審査、博士論文審査及び最終試験に合格し、課程を修了できた。

2 今後に向けての改善点

2023年度に実施した既修了生のアンケートでは、研究進捗状況中間発表会と予備審査の間隔を長くすることを望む意見があり、各DPの修得がよりスムーズに行えるよう、研究計画検討会、研究進捗状況中間発表会、予備審査等の開催方法を検討することが継続的な課題である。

令和6年度 社会福祉学研究科博士前期課程 アセスメント結果報告書

1 評価結果

前期課程の総合福祉コース（以下、総合福祉）・臨床心理コース（以下、臨床心理）の科目群には複数の DP が関連し、DP 相関はコースで異なる¹。令和 5 年度から PCH 構想²に基づき科目群（モジュール）の基底を変更し DP 相関も再構成¹しており、1 年次、2 年次ともに新科目群の平均 GPA³に基づき学修成果（科目群の DP 達成への寄与）を評価した。

なお、科目群及び関連 DP（総合福祉 / 臨床心理）は、「基盤科目群」（DP1・5・6 / DP1）、「公共・総合マネジメント学科目群（DP1・2・5 / DP1・2）、「臨床・実践学科目群」（DP2・3・5 / DP2・3・4）、「人間科学科目群」（DP5・6 / DP3・4・6）、「心理科目群」（臨床心理のみ履修、DP3・4）、「実習科目群」（DP5 / DP4）、研究指導 I（DP6 / DP6）である。なお、DP4 は臨床心理のみ、DP5 は総合福祉（社会人）のみに対応している（下記表参照）。

	アセスメント名称	内容等	総合福祉		臨床心理		関連DP	
			科目数	活用データ	科目数	活用データ	総合福祉	臨床心理
1年次	基盤科目群 GPA	科目群の平均GPA	5	2.90	3	3.00	1, 5, 6	1
	公共・総合マネジメント学科目群 GPA	科目群の平均GPA	4	3.00	0	0.00	1, 2, 5	1, 2
	臨床・実践学科目群 GPA	科目群の平均GPA	4	3.09	3	3.00	2, 3, 5	2, 3, 4
	人間科学科目群 GPA	科目群の平均GPA	2	3.00	7	3.00	5, 6	3, 4, 6
	心理科目群 GPA	科目群の平均GPA			8	2.96		3, 4
	実習科目群 GPA	科目群の平均GPA	1	3.00	2	3.00	5	4
	研究指導 I	科目群の平均GPA	1	3.00	1	3.00	6	6
2年次	基盤科目群 GPA	科目群の平均GPA	0	0.00	0	0.00	1, 5, 6	1
	公共・総合マネジメント学科目群 GPA	科目群の平均GPA	2	3.00	0	0.00	1, 2, 5	1, 2
	臨床・実践学科目群 GPA	科目群の平均GPA	1	3.00	1	3.00	2, 3, 5	2, 3, 4
	人間科学科目群 GPA	科目群の平均GPA	0	0.00	1	3.00	5, 6	3, 4, 6
	心理科目群 GPA	科目群の平均GPA			1	3.00		3, 4
	実習科目群 GPA	科目群の平均GPA	0	0.00	2	3.00	5	4
	研究指導 II	科目群の平均GPA	1	3.00	1	3.00	6	6

1 年次のうち、「基盤科目群」（総合福祉 DP1・5・6）が 0.10 ポイント、「心理科目群（臨床心理のみ設定）」（DP3・4）が 0.04 ポイント、それぞれ「優」水準（3.0）より低いが差異は僅かで、特段の課題は見られない。それ以外の科目群の平均 GPA は両コースとも全て「優」水準（3.0）であった。また、2 年次については、科目群の平均 GPA は両コースとも全て「優」水準（3.0）であった。よって、両コースの各学年ともに、各 DP 関連の科目群平均 GPA は概ね優秀と評価される水準を達成し、学修成果が認められる。

2 今後に向けての改善点

令和 6 年度より PCH 構想に基づく新科目群に全学年が移行し、概ね優秀と評価される水準を達成したものの、GPA のポイントが「優」水準よりも低かった科目群では、科目内容も含めて改善すべき課題について検討を進める。

1 総合福祉コース・臨床心理コースの新旧カリキュラムマップを参照

2 社会科学（政策 P、臨床 C）・人間科学 H の領域を基底に各専門研究とのトランスファラブルな学修達成を意図した

3 科目群ごとの平均 GPA によるアセスメント一覧を参照

令和6年度 社会福祉学研究科博士後期課程 アセスメント結果報告書

1. 評価結果

令和6年度のアカデミック・アセスメントの対象となる院生は2年次に1名、そして3年次に5名が在籍している。このうち、3年次の1名を除いた5名が有職の社会人である。

1年次の社会福祉特定研究Ⅰ（DP3・4に対応）により達成された学修成果については博士後期課程経過報告の内容を対象として、2年次の社会福祉特定研究Ⅱ（DP3・4に対応）により達成された学修成果については博士後期課程中間報告の内容を対象としてループリック（下記表参照）により評価することとなっている。さらに、3年次に実施する社会福祉総合研究Ⅰ～Ⅲ（=DP1～3に対応）のアセスメントは提出された博士論文を対象として行うこととしている。

項目	小項目	評価基準	1	2	3	4
研究目的	研究動向	研究動向を適切に把握しているか	いずれの項目も満たしていない	1項目のみ満たしている	いずれの項目もある程度満たしている	いずれの項目についても十分に満たしている
	研究テーマ	研究動向に基づいてテーマを適切に設定しているか				
研究方法	研究倫理	研究倫理上の配慮と対策が講じられているか	いずれの項目も満たしていない	1項目のみ満たしている	いずれの項目もある程度満たしている	いずれの項目についても十分に満たしている
	方法の妥当性	収集するデータと分析方法に適合性があるか				
結果	データの提示	収集したデータの提示・表現の仕方が適切か	いずれの項目も満たしていない	1項目のみ満たしている	いずれの項目もある程度満たしている	いずれの項目についても十分に満たしている
	データの分析	データ分析が適切に実施されているか				
考察・結論	結果の解釈	結果の解釈が妥当か	いずれの項目も満たしていない	1項目のみ満たしている	いずれの項目もある程度満たしている	いずれの項目についても十分に満たしている
	一般化と限界	結果の一般化と限界について言及しているか				
プレゼンテーション	レジュメ	発表内容を簡潔・明瞭にまとめているか	いずれの項目も満たしていない	1項目のみ満たしている	いずれの項目もある程度満たしている	いずれの項目についても十分に満たしている
	発表	聞き手の理解を考慮した発表となっているか				

① DP 3～4：社会福祉特定研究Ⅱ（中間報告の内容）

今年度は、中間報告会において提出されたレジュメ（4ページ）に基づいて研究科後期課程教務担当者が評価を行った。2年次は在籍する院生が1名であるが、いくつかの研究を並行して実施している段階であり、ループリックの評価は項目全体にわたり2～3の段階であった。1年次からの進捗は見られるが、一部の項目には基準を満たしていない部分もあり、その点についてのフィードバックと助言が必要である。

② DP 1～3：社会福祉総合研究Ⅰ～Ⅲ（博士論文等の内容）

3年次の5名は、研究の進捗の遅れや勤務先の職務との兼ね合いで令和5年度は論文提出を断念した。したがって、これらの科目についてのアセスメントは実施しない。

2. 今後に向けての改善点

研究科後期課程が設置されて以来、入学する院生は各年度に0～3名程度という状況が続いている。したがって、入学者が1名の年度においては、アセスメント結果の報告が個別事例の報告となってしまう。先にも述べたように、アセスメントはその趣意を個別事例に置いているのではないことから、少人数を対象として行うアセスメントにはプライバシーの保護との折り合いをどのようにつけるかという問題が内在している。

令和6年度 ソフトウェア情報学研究科博士前期課程 アセスメント結果報告書

1 評価結果

DP1 は学習および研究遂行能力に関する項目である。令和5年度と比較すると、令和6年度の全科目平均GPAは、1年生で上昇、2年生で低下した。ただしその差は小さく、学生が意欲的に学習に取り組んでいることが確認できる（根拠資料=成績統計II：R6後期GPAと科目別・授業別成績評価一覧）。また、2年生の研究遂行能力については、公開ゼミナールおよび修士学位論文審査において、主査・副査がその定着を確認した（根拠資料：学位論文予備審査、修士学位論文審査）。

DP2 は、社会的責任に関するDPである。1年生は「リサーチリテラシA」の単位取得を通じて、研究者倫理の習得を確認した。2年生は学位論文の予備審査および修士学位論文審査において、主査・副査が社会的責任に関する能力を確認した（根拠資料：学位論文予備審査、修士学位論文審査）。

DP3 は、問題解決に関するDPである。1年生については、「ソフトウェア実践演習」および「プロジェクト実践演習」の単位取得を通じて、問題解決能力の習得を確認した（根拠資料：ソフトウェア実践演習報告会資料、プロジェクト実践演習報告会資料）。2年生については、学位論文の予備審査および修士学位論文審査において、問題解決能力が身についていることを主査・副査が確認した（根拠資料：学位論文予備審査、修士学位論文審査）。

DP4 は、専門知識に関するDPである。1年生については、専門科目の単位取得を通じて、専門知識の習得を確認した（根拠資料：成績統計I：R6前期GPAと科目別・授業別成績評価一覧、成績統計II：R6後期GPAと科目別・授業別成績評価一覧）。2年生については、修士学位論文審査において、専門知識が身についていることを主査・副査が確認した（根拠資料：修士学位論文審査）。

DP5 は、コミュニケーション能力およびプレゼンテーション能力に関するDPである。1年生については、基盤科目である「リサーチリテラシA・B」および「サイエンスコミュニケーション」の受講を通じて、一定レベルへの到達を確認した（根拠資料：成績統計II：R6後期GPAと科目別・授業別成績評価一覧）。2年生については、公開ゼミナールおよび学位論文予備審査において、コミュニケーション能力・プレゼンテーション能力が身についていることを主査・副査が確認した（根拠資料：公開ゼミナール、学位論文予備審査）。

2 今後に向けての改善点

令和6年度以降に向けて、授業アンケートの結果を活用した各DPに関連する定量的な評価方法を検討し、大学院生の目線も含めた習得状況の把握が望まれている。教員と学生双方の視点から学習・研究成果の達成度を評価することで、教育改善や学修支援に活かすことが可能となる。

令和6年度 ソフトウェア情報学研究科博士後期課程 アセスメント結果報告書

1 評価結果

DP1 は、学習能力および研究遂行能力に関する DP である。特別公開ゼミナール I・II において、主指導教員および副指導教員がその能力の定着を確認した。また、博士学位論文審査において、研究遂行能力が身についていることを主査および副査が確認した（根拠資料：特別公開ゼミナール報告書、博士学位論文審査）。

DP2 は、社会的責任に関する DP である。博士課程においては、学位論文予備審査および博士学位論文審査において、主査および副査が研究倫理や社会的責任の自覚が身についていることを確認した（根拠資料：学位論文予備審査、博士学位論文審査）。

DP3 は、問題解決に関する DP である。ソフトウェア実践特別演習もしくはプロジェクト実践特別演習において、グループやプロジェクトとして問題解決を実践的に学び、単位取得にて確認した（根拠資料：ソフトウェア実践特別演習報告会資料、SPA 実施報告書、プロジェクト実践特別演習報告会資料）。また、学位論文予備審査および博士学位論文審査において、身についていることを主査および副査が確認した（根拠資料：学位論文予備審査、博士学位論文審査）。

DP4 は、専門知識に関する DP である。博士学位論文審査において、身についていることを主査および副査が確認した（根拠資料：博士学位論文審査）。

DP5 は、コミュニケーションおよびプレゼンテーションに関する DP である。特別公開ゼミナール I・II、学位論文予備審査、博士学位論文審査において、身についていることを主査および副査が対面で確認した（根拠資料：特別公開ゼミナール I・II、学位論文予備審査、博士学位論文審査）。

DP6 は、価値創造に関する DP である。博士学位論文審査において、身についていることを主査および副査が確認した（根拠資料：博士学位論文審査）。

DP7 は、人類への貢献に関する DP である。ソフトウェア実践特別演習もしくはプロジェクト実践特別演習において学び、単位取得にて確認した（根拠資料：ソフトウェア実践特別演習報告会資料、SPA 実施報告書、プロジェクト実践特別演習報告会資料）。また、学位論文予備審査および博士学位論文審査において、身についていることを主査および副査が確認した（根拠資料：学位論文予備審査、博士学位論文審査）。

2 今後に向けての改善点

達成状況の判定においては、個別の状況を可視化できるような達成度の基準を整理することで、より精緻な判定を行うことが望ましい。具体的には、各 DP に、能力の習得状況や研究遂行状況、社会的責任、問題解決能力、専門知識、コミュニケーション能力、価値創造、人類への貢献などを可視化し、定量的または定性的に評価することで、客観性の高い達成判定が可能となる。

令和6年度 総合政策研究科博士前期課程 アセスメント結果報告書

1 評価結果

DP1：自然や社会における現象の中から問題を発見し、適切な研究課題を設定できる

DP1は、授業履修、日々のゼミ活動や学生間での意見交換などを通じて育まれる。その成果は、「①研究成果報告書」、「②研究計画書」、「③研究成果発表会」によって確認した。

DP2：急激な社会等の変化を敏感に察知し、又は先んじて自らの行動や研究テーマを柔軟に変えることができる

DP2は、授業履修、ゼミ活動や学生間での意見交換、研究発表を通じて気づき、研究テーマは常に方向性を意識して適切に修正し続けることが望ましい。2年次の「②研究計画書」の作成において、適切に研究の方向性が考えられているかを確認できる。その他の「③研究成果発表会」、「④修士論文構想発表会」、「⑤修士論文」、「⑥修士論文発表会」と合わせて、一つの考えに固執せず、研究活動が適切に進められていることを確認した。

DP3：問題に対して専門的な調査分析を行い、理解を深めることができる

DP3は、所属ゼミでの指導や所属学会への参加等により分析法を学ぶとともに、「③研究成果発表会」や「④修士論文構想発表会」でのゼミ外教員からの助言・指導などにより、気づかなかつた視点からの分析・考察も深まる。その成果は、「①研究成果報告書」、「③研究成果発表会」、「④修士論文構想発表会」、「⑤修士論文」、「⑥修士論文発表会」によって確認した。

DP4：問題の解決のために、自らの専門分野だけではなく、他の分野の視点を踏まえた総合的な思考ができる

DP4は、所属ゼミでの指導の他に、発表会等でのゼミ外教員・学生による指摘・助言を参考にすることで成長する。その成果は、「①研究成果報告書」、「②研究計画書」、「③研究成果発表会」、「④修士論文構想発表会」、「⑤修士論文発表会」、「⑥修士論文」によって確認できる。修士論文の執筆に至る多くの発表会・報告書に基づき、複数視点からの分析、総合的考察によって修士論文が構成されていることを確認した。

DP5：思考の結果を適切な方法で第三者に伝えることができる

DP5は、「③研究成果発表会」、「④修士論文構想発表会」、「⑤修士論文発表会」等の機会に確認できる。発表時のデータ提示とその説明、質疑に対する受け答えから、自身の考えを第三者に伝える能力が備わっていることを確認した。

2 今後に向けての改善点

就業中の大学院生の場合、在学期間のうちに学会発表したり学術誌に論文投稿したりする時間的余裕が無い。全国的な学会等に参加することによって自身の研究テーマや研究方法を見直すきっかけになるが、その機会を十分に活かせていない。自然科学分野のゼミに所属する通常の大学院生が学会・研究会等への参加・発表に取り組んでいることは「①研究成果報告書」で確認できており、研究への取り組みに関して学生間の差が大きい。

令和6年度 総合政策研究科博士後期課程 アセスメント結果報告書

1 評価結果

DP1：学界に対し学術的に貢献しうる先進的な研究課題を設定できる

DP1は、日々の研究活動や学会参加によって身につく。その成果は、「①研究成果報告書」、「②研究計画書」によって確認した。

DP2：急激な社会等の変化を敏感に察知し、又は先んじて自らの行動や研究テーマを柔軟に変えることができる

DP2は、教員・院生との意見交換、学会参加などを通じて気づき、常に方向性を意識し、必要に応じて修正し続けることが望ましい。毎年度はじめに提出する「②研究計画書」によって、適切に修正が加えられていることを確認した。

DP3 問題に対して高度に専門的な調査分析方法を開発し、効果的に適用できる

DP4 問題の解決のために、学際的な視点を踏まえた考察ができる

DP5 思考の結果を学問的に厳正な方法で他の研究者に伝えられる

DP3・DP4・DP5は、所属ゼミでの指導や所属学会への参加・学会発表等によって身につけることが基本である。「①研究成果報告書」、「②研究計画書」等の文書作成を通じて表現力等は確認できるが、学会発表・論文発表の成果が報告されていない学生もあり、彼らに関しては十分に能力が鍛えられているとは言えない。

DP6 研究の過程を適切な方法で管理できる

DP6は、毎年の「①研究成果報告書」・「②研究計画書」の作成によって確認できる。どちらも指導教員と相談しながら作成しており、本人の研究スケジュール管理状況を指導教員が確認し、その指導状況も含めて研究科長がコメントを付けて研究科委員会で報告・確認している。

2 今後に向けての改善点

令和6年度も博士号取得者がいなかつたため、「④博士論文中間発表会」・「⑤博士論文」による教育課程アセスメントは確認できていない。

また、在学生がすべて就業中の学生のため、学会発表・論文執筆等の研究活動に十分に取り組めていない学生もいる。